

⑧ここで寄り道の一つとして、応用問題を解こう。

読売アンデパンダン展の世評は、もうアン展は終わったといい、もうやめてもよいだろうといっている。全く良識的で立派なことだ。それ等には同感するだけだ。しかし実作者としては、「性の欲望」には勝てないのだ。「判っているがやめられない」のだ。だからこ そ、そんな立派なことを批評家がいって、メシのカテにできる要素を持っているのだ。しかも同一の批評家が、団体展評では逆のことをいって、アン展で、また逆なことをいう。それらの言葉自身を、もう一度考えなおすべきだろう。それは出品者では勿論なく、それ等批評家と、既成の画家たちだ。なにはともあれ、まだまだ悪評に答えなければ、本当にアン展、いや日本の絵画は「神」の座を確保することは困難だ。とにかく悪評どおり、忠実に、その悪評を手本として実行する時、まさに、その批評が役に立ち、アン展は「アル」のだろう。そして、アン展では「やりたいことをやればいいのだ」そして、それがやれないなら、また「やれる所を作る」ればよいのだ。その「やれる所を作る」のがグループの存在意義なんだ。だからアン展自体も、美術館という問題も、二律相反した存在だが、問題とするべきではなく、場所が比較の問題として「便利」だということを最大限に活用すればいいのだろう。

目的とは、離れても「それが便利だから」という、それだけの理由で使用し、利用しなければならぬ場合は実に多いものだ。要は 利用したという前近代的倫理的束縛におちいらぬことだ。のびのびと朝の食事のよう、愉快にそれ等を食べて目的はなくとも、フトレば病気はしない、という「幸せ」だけは確実に訪れる筈だ。